

翻刻『松ヶ丘山崎家略譜稿本』⑨

Ⅱ初代ⅰ三代の事績、晨園以降の開拓事業Ⅱ

イ 第一世山崎才兵衛君事蹟

初代才兵衛君は、性篤実温厚にして特に慈悲心に富み且つ信仰心厚く弱者を憐むこと児の如し。元文の始め寺ヶ谷山崎弥左衛門方より伊達方に分家し、幾はくもなく掛川宿西町（現今五百九十五番地）に來りて油商を以て業となし、勤儉克く産を治め、家業益々旺にして基礎愈々固し。而かも身を節して仁を郷民に垂れしかば、衆人尊敬せざる者なかりしも、偶ま病を得て宝暦五年五月七日遂ニ西町の邸に歿す。寿 歳。是より先三年宝暦三年八月廿九日妻女歿す。釣無乗竿大姉と諡し寺ヶ谷本家の後山に葬り、其の子に遺言して曰く、我死せは亦然るへしと。爰に於て立戒定地居士と諡し妻女と共に合葬す（墓誌弥左衛門家の條参照）。君本郷村小澤氏の女に配し二男を挙げ。次は夭折す。長子萬右衛門君家を嗣く。

ロ 第二世萬右衛門君事蹟

萬右衛門君は先考才兵衛君の長子なり。性温厚篤実にして勤儉力行決して父に譲らず、家産愈々増大す。當時同町内に村松龜右衛門とて近郷比類なき素封家あり。当山崎家も勢威隆々略ほ伯仲の間に在りければ、郷民は一を西龜と称し当家を西萬と呼ひて其の声望を並ひ称せしなり。従て当代より太田藩勝手向の御用を相勤めたるものゝ如し。即ち第四世晨園君に對し文化十年御用達を仰付られし狀に祖父以來御用向出精相勤候に付云々の文言あるを以て明らかなり。然るに明和六年七月二十日（源心庵過去帳に七月廿日とあり）を以て歿し無得円心居士と諡し南西郷村曹洞徳雲寺境内に墓地を新設し爰に葬る。

妻女は夫君に先つこと九年、宝暦十年五月六日歿し、古水妙帆大姉と諡し早く既に徳雲寺墓地に葬り、後室を迎へて家業に精勵せしか、安永元年九月朔日歿す。唯心靈妙大姉と諡し同しく徳雲寺

の塋域に葬る。萬右衛門君二男あり。次子綱禪君若くして僧籍に入る。長子萬右衛門君家を嗣ぐ。

達道綱禪和尚の事は第四世
旭君の事蹟中に記事あり

(※上巻は以上で終り)

(※下巻表紙)

紀元二千六百年記念編纂

松ヶ丘山崎家略譜稿本 下

袴田鷹邨未定稿

ハ 第三世山崎萬右衛門君事蹟

第三世山崎萬右衛門君は第二世萬右衛門君の長子として西町の邸に生れ、母は古水妙帆大姉なり。明和六年八月先考の死によりて家を継ぐ。勤儉力行父祖の遺業を繼承して倦む所なし。家産弥々増大し正に当地名族を以て称せらる。従つて当代旺んに諸侯の御用を弁したるものゝ如し。然れ共寛政十年七月九日病を以て逝く。仏参自性居士と諡し南西郷徳雲寺の塋域に葬る。妻女すみ又貞淑の誉れ高かりしか文政五年三月八日歿す。寿六十七仏光映性大姉と諡し同徳雲寺の墓地ニ葬る。

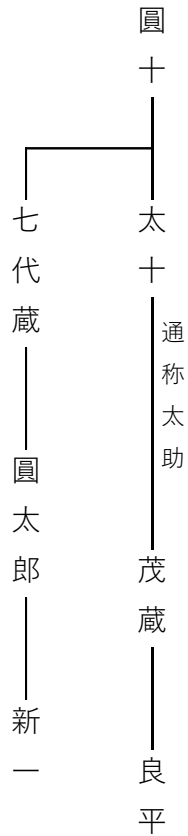
萬右衛門君一男二女あり。長女は十王町に分家せしめ次女は嫁せずして歿す。長子旭君家を嗣ぐ。

ニ 第四世山崎万右衛門君事蹟

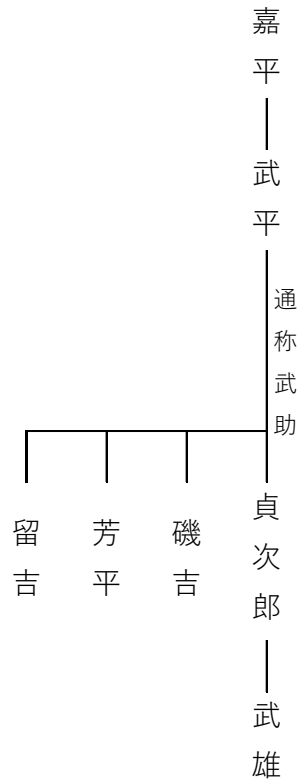
第四世万右衛門君は安永三年西町の邸に生れ母を仏光映性大姉とす。幼名旭通称を才兵衛と称し民猷と号す。又太田候より書を賜はり居を晨園と号す。又別に以善堂或は環中子と称せしか如し(書庫に蔵する家記に、萬右衛門字晨園号以善堂又号環中子、仏氏名温林

良恭居士とあり）。父萬右衛門君死歿するや寛政十年家を継ぎ、専心父祖の意を継承して勤儉力行益々家産を興し、広く殖産興業の道を講し先づ家則（遺家訓）を制定して後昆の履むべき大道を明らかにせり（代々事蹟の冒頭に掲載）。就中痛く農村の疲弊と耕地の荒廃を慨し、全力を傾注して之か救済の策を講せんとす。当時南西郷村には角田及太池と称する二区域の田地あり。同地は何れも亀甲村の中間飛地にして、田畑相当の面積を有するに拘らず、南西郷の田面中央部と一は本村聚落部との間二重三重の小山脈を以て阻まれ、瀦水池無くして用水灌漑に困難なる而已ならず、人家遠くして年一年耕地は荒廃し、従て該地域の田地を耕作せんとする者無きに至れり。晨園君大いに之を憂ひ、同地救済の一着手として文化十四年巨費を投して南西郷久保区新知に溜池（マストラ池と呼ぶ）を築造し、且農民交通の便并用水路設置の爲め山脈に数力所の隧道を掘鑿して、自由に交通し灌漑し得るの方策を講し、次に村民をして角田及太池に移住せしめ耕作上の便を計る。即ち文政三年村方乙吉、神代地藤助、及同四年久蔵・嘉七・忠次の三軒を角田に、嘉永年間大橋円十、田邊嘉平、朝比奈富蔵の三戸を太池に移住せしむ。該移住奨励の策として角田及太池共新家作者には家作費用を給与し、或は宅地の年貢を免除し、若くは移住に要する一切の費用を無利足年賦を以て貸与する等種々の方法を講じて奨励に努めたる爲め、辛ふして前記の移住者を出し、耕地の荒廃を恢復したり。之が爲め嘉永元年領主太田侯より褒賞を与へられ、其の文言に之か成績を叙せらる（恩賞の項参照）。其の後角田の新家作者は都合により悉く他に転したるも、太池移住者は今日に継続せり。今太池移住者の略系を示せば、

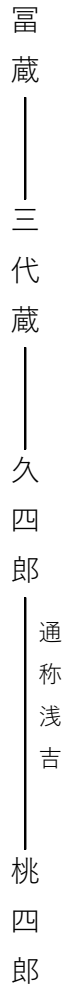
大橋嘉吉方より分家



田邊千代次郎養子



朝比奈藤右衛門長男



是より先久保澤栗ノ木谷を開拓して田地を墾し、溜池を谷奥に新築して灌漑に不足なからしめ、文化十一年此処に草舎を建造して、農民の疾苦を救ひ、自ら栗谷蔵草舎の記を作る。文慊堂全集にあり左の如し。

栗谷蔵草舎記代山崎晨園

甲戌冬十月、作ニ草舎於小笠山陰之栗谷一憑ニ高丘一以面勢、去ニ
闌闌僅里餘一醇醪大異、余初遊ニ此地一也、有レ客謂レ余曰、闌ニ此
荒蕪一可ニ以為ニ稻田一、余以ニ無埭水一難レ之、客曰、尾人善開墾、
其效ニ著於隣國一今能招致、削レ隆為レ平、築レ塘為レ段、極處構レ池、
爲ニ之水源一、不ニ唯閑壤生ニ稻梁一、而猪鹿遠、狐兔遁、而村田之在
レ旁者、亦免ニ其齧蹴蹂躪之患一、而其餘瀝之所ニ沾漑一必廣、又能捐
ニ萬緡一僦ニ土人一、土人之貧、亦足ニ以賑一、何如、余大然レ之、於
レ此與ニ尾人一從レ事、自レ春迄レ夏、殆百餘日、朝霧夕露、不ニ敢厭
廢一、前指後畫、村人勦レ力、時齎ニ酒食一、相與勞勉、每レ及ニ農隙

一復然、凡得二墾田一七十畝、其間一成一毀、且瀦且漏、前後八年、始能就レ緒、乃鑿二山腹一作二屋三間一、擇二奴之淳者一配婢以居、遂有二藏草舍之舉一、夫農者刈レ草、夏秋以峙レ之、當二春時嫩緑未レ肥之前一、散二之水田一、以爲二養レ禾之資一、此境陝陋無二地峙一レ之、乃就二屋後丘上、芟二其蕪一剗二其頂一、將二屋而藏一レ之、地既高爽、所レ觀益曠、練原右引、淡山左峙、沃野東連、治城西延、而岳蓮萬仞、儼當二其間一、聯レ嵐含レ輝、雲霞卷舒、旦夕百變、余心竊樂レ之、以爲徒委二之藏草之處一、非レ爲二造物者之含一レ羞乎、暮秋而藏、仲春而散、苟借散草之際、以爲二觀游之處一亦何害二農事一、於レ是作レ舍、其制倭小、不レ擇レ材、不レ呈レ巧、買二邑中廢宅一、以爲二之料一、既成、樸者淳、粗者雅、舍之東南、樹以二松梅桃櫻一、又蒔二杉數千一、名曰二栗谷藏草舍一、維余陋巷小民、頼二先人薄產一、銖鎰累積、以致二小安一、又幸不レ爲二士君子所一レ棄、頗知レ讀レ書、講二孝友睦婣之義一、自レ今以始、三時散草之餘、遭二良辰美景一、事罕務間之日、與親戚故舊及士君子之辱臨レ余者、諷二詠游衍於斯丘之上、或論二桑麻一、或講二文義一、濁酒數行、園味一盤、以酬二佳景一遣二滯抱一、興到詞暢、相興頌二邦君之渥澤一、樂二吾生之皞虞一、此實余之鄙願也、天又幸假以二眉壽一、婚嫁縁畢、致二家事佳兒佳婦一、投二老此中一、得二逍遙優游以娛二暮年一、則又何尚焉、詩不レ曰乎風興夜寐、莫レ忝二汝所一レ生、又曰、今我不レ樂日月其除、無二已太康、職思其居、職思既勤、亦可二以少樂一矣、苟職思之不レ勤、而專謀二觀游之適一、是則敗門落戸之事、而余雖二無似一、亦知レ免矣、子孫識レ之、遂記二其巔末一并叙二余志一、以寘二於壁中一、文化乙亥秋九月

乍恐以書付御届奉申上候

新知御林内字ますら

一溜池請堤切所 壹ヶ所

但 内側二而平均長拾貳間半數拾壹間

馬踏式間 高四間
外側二而平均長拾間 敷七間

馬踏式間 高四間

此土坪四百八拾五坪

内百坪但長拾式間半 中式間

高四間 真刃金七分

一右請堤切所左右多之目築堅メ之上
惣長三拾間堤上置

但平均高五尺 巾二間半

此土坪六拾式坪五合

一早口場所替新規堀割長三拾間

但岩切抜平均深七尺五寸巾二間

此岩坪七拾五坪

一埋樋式挺外側二而流失之分伏替

是ハ去未暮奉願上御林内より

松立木式本被下置候

右溜池之儀ハ式拾ヶ年以前文化十四丑年西町山崎万右衛門発
端ニ而新知御林内江池敷奉願上同年冬方自普請取掛リ翌寅年
初夏迄ニ出来仕埋樋以下木方之義ハ御林内より不残被下置皆
出来之上御届申上御見分奉請候処為御手当御米九拾俵被下置
惣入用置之義ハ一旦万右衛門自力ニ而出金仕候処同町村松亀
右衛門義茂兼而万右衛門江内談御坐候上右入用金之内内ニ出
金仕候趣ニ而全く兩人之力を以村中は适用水之弁利宜作立仕
候然ル処去未六月晦日之洪水ニ而請堤之内押切村中非力之百
姓当迷仕罷在候所猶又当万右衛門自力ヲ以修覆仕度段村中江
相談之上去暮より取掛リ申候所当月中旬迄ニ皆出来仕候ニ付
此段御届奉申上候依之右出来於何卒御見分被成下候様奉願上
候

右願之通り被仰付被下置候ハ、難有可奉存候以上

南西郷村

天保七申年三月

百姓代―印

組頭

庄屋

御代官 名殿

差上申一札之事

右者此度ますら池修覆ニ付私共請負仕未暮方当申三月迄御普請
出来候処右請負金定之通り金七拾八両慥に請取申候尤先備金并
御米代味噌諸色差引ニ被成下不殘相済申候為後日一札差上申処
仍而如件

天保七年申年三月

尾州玄鍬 茂八

山崎万右衛門様

此の頃また山口に住する同門の振はさるを悲しみ、廿二家の山
崎に対し金百兩を支出して義田を備へ、之か所得に依りて同門を
助成したり。依て同門相謀りて本金の内牛頭村組に金五拾七兩、
寺ヶ谷組に金四拾参兩を分配し、牛頭組は其の俣直ちに掛川山崎
家に託して保存し、年々利子を以て一門の供養を執行し来りたる
が、大正十四年十二月廿六日に至り元利計金貳百九拾壹円九拾七
錢に増加殘存したるに依り、松ヶ丘より受領し彦左衛門家の当主
彦次郎氏保管し、従来と渝る事なく年々利子を以て一門の法要を
営み、殘余は現住者に分配す（山崎彦次郎氏談）

寺ヶ谷組は前記助成金を以て田地壹反壹畝余歩、散田参俵九升
の土地を購入し、尚殘余金拾参兩を得て之を掛川山崎家に保管を
託し利倍増殖す。該田地の所得に依て年一回一門の法要を行ふを
例とし今日に及へり。而して寺ヶ谷に於ける義田所得の經理方法
は小作米の収入より租税を控除し、殘金を十七分し其の二宛を善
次郎・嘉六兩人か所得し、十七分の一を真作に交付し、殘余の十

七分の十二を弥左衛門の末孫卯平家に納め、同家に於て法要一切の費用を負担す。元来如何なる事情にて歟弥作には所得の分与なし。佐市は従前分与せしも故あつて六治郎氏の代より分与を停止す。

昭和年代に入り村中耕地整理の事業を行はれ、券面外の過剰地ありたるを以て之を購入し、現今は壹反三畝余歩に増加したるも、散田米は三俵壹斗五升（旧散田三俵九升と四斗俵に改正差額六升を加へ）を以て小作預けとなし居れり。

南西郷助成金に就而も矢張り農園時代農民撫育を根幹とせる諸事業を行ひたる遺物にして、其の内水利土功に関する大体は家蔵の遺書により之を窺ふことを得。左に順次其の梗概を記さん。

覚

一金六兩壹分ト	乗安寺山掘貫
貳百七拾二文	穴人足代払
一金拾三兩貳朱ト	みせす井道人足払
五百参拾六文	四百拾九人四分
一金拾兩壹分ト	松久保穴掘貫
三百四拾壹文	人足代払
一金拾八兩貳朱ト	八ヶ谷大穴掘貫
四百六文	人足代払
一金貳兩ト	同所小穴同断
六百文	人足代払
一金拾四兩壹分ト	井道人足
百拾貳文	四百五拾三人（但壹人ニ付貳百文掛り）
一三百貳拾四文	水盛道具
	板棒代
一五百五拾六文	同断
	大工作料

一貳百三拾貳文

同断

糸釘代共ニ

一金三分貳朱ト

土持木大小

五百八拾四文

拾三本代

一金貳分ト

五尺杭百廿四本

四拾四文

四尺杭九拾四本代

一金壹分貳朱ト

鶴直シ代

貳百八拾六文

一金三分ト

普請酒代

三百拾貳文

一金四兩貳朱ト

後普請八ヶ谷井道

四百六拾六文

人足百三十三人三分

𠂇金七拾兩貳分貳朱ト五百九拾五文

六三五

為金七拾壹兩壹分ト三百三拾壹文

一金貳拾壹兩

新家三軒江遣ス

但壹軒江七兩宛

惣𠂇金九拾貳兩壹分ト三百拾壹文

差上申急借証文之事

一金五兩也

右者村方用水穴普請之儀ニ付諸弘方入用金先達而方度々借用仕
猶又今度書面之金子御借用仕都合金三拾兩ニ相成候処相違無御
座候追而本証文連印仕差上可申候爲後証ニ仮証文仍如件

嘉永二年酉十二月大晦日

南西郷村

組頭 孫右衛門

掛川山崎万右衛門様

参考 金拾兩十二月十五日借用 都合三拾兩となる
金拾五兩同月廿五日借用

嘉永五年

南西郷助成金始末書上控
(横長帳表紙)

子壬二月

今度用水穴掘貫之儀者山崎万右衛門様代々世話致呉候当村助成金見当
テ取掛リ大願成就仕候趣申上置候得共今度右用水穴間数并先年掘貫候
亀甲へ通路穴扱又満寿ら池抔迄絵図面ニ認メ右新穴間数并用弁之田方
町歩書印可罷出段地方御役所より被 仰付差出申候

絵図面壹枚

当村池不殘

古穴新穴

亀甲池并村堺

用水路間数迄

新穴用弁之田方

松久保谷

七反式畝歩

此分米八石式升程

同断

壹町五反六畝程 蓮池谷

此分米十七石三斗余

同断

拾八町六反五畝余 東田方

此分米貳百拾六石余

右之通書上申候

前文絵図面町歩之儀者地方御役所方御用御尋ニ付書上候処助成金之儀
者名波門吉様御心得之様に御申越被成候得共元祖等満々と御聞御頼被
成候ニ付左ニ書上申候

南西郷助成金仕様

文化十二寅年

右者亥暮従

一金貳拾六兩 御上様米七拾俵被下置候代金

三分貳朱

永四拾八文

一金壹兩 右者先庄屋八兵衛御年貢御未納三百余俵当役方

三分貳朱 年賦ニ拝借仕金納ニ仕候処右直違余り

一金壹兩貳朱 御代官様江三拾兩上納分不足ニ付山崎万右衛門

永七拾七文 暫之内取替申候分足金

三口 亥暮御代官様へ御預ケ分

𠂇金三拾兩 上納年八分利ニ被成下候

子利貳兩壹分貳朱

永貳拾五文

此利金ト

御貸附ニ相成壹割貳分五厘

丑此利壹分ト永五拾文

丑利貳兩壹分貳朱

永貳拾五文

𠂇金三拾五兩ト永百文

内金壹兩壹分貳朱 山崎万右衛門足金分

永拾九文三分ト貳兩年利足ト共引

残金三拾三兩貳分貳朱

永八拾文六分八厘

内金参拾兩 是を御窺之上百姓江貸渡置申候

残金三兩貳分貳朱

永八拾文六分八厘

此頃先庄屋八兵衛様ニ及ひ御年貢米参百余俵不納村差出しニ相成其外
ニ藤町惣左衛門方ニ裏御印之証文借財有之諸事扱等山崎万右衛門立入
前村金等種々手繰致呉候

文政元寅年より丑年迄 鷹云 文化十四丑年方安政元寅年迄の

満寿ら池仕立呉申候 誤記多シ（※朱書）

文政三辰暮

村方乙吉神代地茂助等ニ手当金遣シ田方最寄へ家普請為致申候

文政四巳春ろ

角田坪田ノ中江屋敷取久藏嘉七忠次等他村ろ引入新家茂仕立此所者惡地之上方ニ而向後宜敷可有之と山崎万右衛門世話仕呉候得共此新家之儀者時節不至哉四五年之間ニ病氣其外不殘引らニ相成前後此入用者当村入作之内身元宜衆中江御頼申積金等仕 御上様江上納格別之高利ニ御下ケ被下金主へ薄利ニ遣せ右利違等猶又前文村金杯を以諸事手入仕候得共何分水払底之村方ニ付手余り地厄介招兼候間

文政六年未同七年申同八酉年三ヶ年之間

御上様ろ金四両宛被下置手余地除荷猶又当村儀者遠作故田ろ方へ新近道等を仕立并龜ノ甲村池ノ西山の中段へ用水路を拵先年掘貫候穴の水を龜甲池江不入ニ引取候手段種々仕然ル処

文政十亥年ニ至り地方御用達様へ金百両御預ケ申度旨ニ而相改候所被下置候金子并積金之分諸事手入金引去り之余

村助成金分

七拾二両壹分永百廿弍文三分

山崎万右衛門足金

弍拾七両弍分弍朱永弍文七分 暫取替

二口へ金百両也 地方御用達江御預

年八分利ニ御下ケ被下候

文政十一子年ろ

天保三辰年迄ニ

山崎万右衛門足金分引去之余

村金百六両壹分永八拾文八分五厘

内金百両 南西郷村助成御預ケ有之分

金六両壹分永八拾文八分五厘山崎万右衛門預リ

百両之利下ケ

巳年金八両 山崎万右衛門預リ

午年金八両 同人預リ

未年金八両 同人預リ

内金貳拾三兩貳朱永五十三文三分三厘出金

右者満寿ら池大破損堤押切手入普請七拾八兩三分余掛リ
御上様方御米三拾六俵被下置

此金廿兩三分三朱

村松亀右衛門様方米御見舞被下

此代金貳兩壹分貳朱

山崎万右衛門様方

足金三拾貳兩貳分余

申御利足下ケ

金八兩 山崎万右衛門預リ

酉利金八兩 同断

内金拾兩壹分永六文三分三厘三毛

是者昨申大違作ニ付西夏ニ至リ村方窮民へ米遣し申候

戌利金八兩 同人預リ

内金拾五兩

村方ニ而無抛故障入用庄屋銀右衛門江相渡ス

亥利金八兩 同人預リ

子利金八兩 同断

丑年方六分五厘

御利足下御趣意

金六兩貳分同断

寅利金六兩貳分同断

内金六兩貳分

当年村入用多分ニ相掛候間助成金加入

卯利金六兩貳分同断

内金六兩貳分

前年同断村入用加入

辰利金六兩貳分同断

巳利金六兩貳分同断

午利金六兩貳分同断

未利金六兩貳分同断

内金拾三兩

右者西澤池修覆入用加入申七月

申利金六兩貳分同人預リ

内金三拾三兩

右者西二月^方壬四月迄渡 用水穴新掘貫入用之内

酉利金六兩貳分同断

戌利金六兩貳分同断

内金拾六兩

是者新家之者江普請手当ニテ渡ス

金五兩 右同断相渡

金六兩三分貳朱永貳拾文九分八厘七毛

用水穴入用

金三拾壹兩壹分貳朱ト百九拾五文

用水穴并井造入用

金四兩貳朱ト四百八拾四文

利足分

利金差引テ

金三拾五兩貳分ト六百八拾三文 不足

外ニ

金三分貳朱ト百貳拾五文

ますら池普請修覆加入

亥利金六兩貳分山崎万右衛門預

又差引テ

金三拾兩 不足

此分山崎万右衛門取替ニ成

差上申一札之事

一米八俵也 但金拾兩二米七俵八分直之時

右者先年南西鄉村為助成旨貴殿方ニ而御取持諸調金被遊久年御世話被成下金百兩ニ相重り右利足高助成ニ可仕思召之處去申大凶作ニ而一統難渋仕候依之貴殿方御米ニ而一曲村内仕割可渡哉ニ被仰任貴意ニ当西三月村役人共貴殿方へ願入書面之御米慥ニ諸取村中人別ニ割渡申処実正也以誠村中一統忝次第奉存候為其一札差上申所仍不如件

天保八年酉三月

南西鄉村

百姓代 定七

同断 角右衛門

組頭 弥藤次

同断 孫右衛門

山崎万右衛門殿

南西鄉村助成金の現状を知る為に、現在の帳簿を抜萃すれは右の如し。

記

一当村積金之義先年山崎万右エ門殿より永々為助成被相附候金及諸事落札金其他各種之金員各々方へ御依頼申候而厚御世話被下客年十二月迄ニ金三百五拾円ニ相成右金之義ハ前条助成ニも相附候金員等格別趣意柄有之候を承知罷在候右ハ兼々御懇談も有之候通後來元利共積立日常区々の差支等二者決而利足ニても不下戻尤全村公益之事業国益ニも関係致候儀ニも有之候ハ長立候方ハ勿論一般協議の上使用致候義も可有之候得共右様不容易趣意柄有之義ニ付最初基立之趣意全村永遠之益を謀り候義故公益之義者格別ニ候得共只々区々たる事ニて烏有に相成候様之義決而申出間敷候間永遠維持保護仕度此段深く及御依頼候也

但積金原因區別調書添

南西鄉村

小前

明治十一年四月五日

姓名 連印

同村用係

田邊八十七殿

朝比奈徳作殿

樽林 八十殿

鷹云 明治十年十二月金三百五十円、資産金貸付所ニ預入しあり

記

一当村積金之義拙者共依頼ヲ受ケ当今資産株金江加入相成居候処
今後同社及諸向江出納之義更ニ貴殿江御依頼申度則出納割符簿
相製シ双方江扣置毎年一般江精算相示し且出納有之時ハ御協議
御依頼仕度依テ一同ヨリ之依頼書相添差出候也

第十大区壹小区

南西郷村用係

明治十一年四月五日

朝比奈徳作

田邊八十七

樽林 八十

同村

山崎千三郎殿

証

農業出精及び品行善シキ者エ賞誉金基本トシテ金百円也御寄附被下
永々維持可致様御厚志辱深謝仕候則右金之義更ニ厚生社エ相預ケ毎年
利息ヅ以賞与相当之者エ甲乙斟酌シテ附与イタシ又附与ニ不及年ハ積
立置一切貴殿ヲ経テ取計候ハ勿論元金及積立利金共素ヨリ他事ニ聊関
係之儀無之特ニ農業及品行奨励之基本ニ限り候儀ニ付爾後仮令天災且
何等之義到来候其他エ使用等相願候義決而無之永々維持致候段為念一
同盟約連印差上置候処如件

佐野郡南西郷村

村会議員

明治十二年七月廿八日

山下 恵吉

松浦 久蔵

柴田 佐市

田邊 銀平

樽林 萬吉

花村 音八

久保田治吉

山田弥藤治

中村 弥吉

小澤佐平治

副議長

山下 萬治

議長

田邊八十七

〃用係

朝比奈徳作

〃戸長

樽林 八十

同村

山崎千三郎殿

同日直に金百円厚生社江預ケ 年利八分

明治廿二年十二月元利計金貳百廿二円七拾貳錢八厘

内金八十一円三十三錢八厘明治廿三年七月十七日引出

明治三十年十二月元利計金貳百拾壹円七拾六錢の処

内金七拾七円六拾四錢貳厘明治三十一年三月廿九日穀高にて南京米購入

の為引出 引計金百四拾壹円四拾七錢貳厘

昭和八年十二月三十一日現在金千百六拾八円也 内金壹千円粃摺機購入

の為昭和九年十月十九日引出

昭和十七年十二月三十一日改元利計金貳百七拾九円参拾貳錢なり

(続)